

# 命の鑑定士

恭介

## 序章

---

子供の頃に誰しものが必ず願い、思うことがいくつもある。

『もっとお金が欲しい』 『有名人になりたい。有名人と付き合いたい』 『異性に好かれたい』  
誰でも一度は願う事だ。

だが無理な事ではない。やろうと思えば叶えられる。

けれど、どうにもならない残酷な願いもある。

『この人を救けて』

自分の愛する者、自分と親しい者、それに近い者が死に瀕する時に願う事だ。

神を信じずに生きてきた者でも時に、その神にもすがりたくなるような願い。

叶うかもわからぬ願いの為に金を投げ入れ願う。

親である者ならばこうも思う。

『自分が代わりに死ぬから救けて』と。

## 変わらない日常

---

死というのは大きく分けて二つあると前田優子は思っている。

一つは予期された死。人はいつか死ぬものだ。だが、癌と宣告されても今すぐに死にます、というわけではない。短くとも余命というものがある。一ヶ月もあれば半月と言われる者もいよう。

もう一つは予期せぬ死。ある日突然交通事故で、ある日は銃で、刃物でと。

そう考えれば、「あなたの余命は一ヶ月です」と言われても案外不幸ではないと思う。一ヶ月あれば出来る事は数多くあるからだ。別れの挨拶も多く交わせる。

だが、前田優子はその境界線にいる。この世に生を受け、どこにでもいる普通の女の子として生きてきた。誰もがこのまま平穏に育っていくと思っていた。

アダムスストークス症候群。それが小学三年生だった時に、優子に突然告げられた病名だった。突然息苦しくなり学校で倒れ、目が覚めたら病院のベッドの上。最初は寝不足からくる貧血かと思っていた。

前日に少し早めの誕生日と学校で流行りの携帯ゲームを買ってもらって、女の子ながらゲームに夢中になっていたからだ。気付いたら夜中の四時。結局寝たのは三時間もなかった。

「その病気って三時間しか寝なかったからなっちゃったの？」

今思うと我ながら恥ずかしくなることを担当医に聞いた。

「娘は助かるんですね？」

母が泣きそうな顔で担当医に言うと

「全力を尽くします」

その日から優子の人生は変わった。

「暇だなあ」

優子は口癖になったこの言葉を一人呟いた。

一日に何十回言っているだろうか。

「暇だなあ」

頭では言うな、と思っているのに口が勝手に喋る。

今日も決まった生活。朝起きて早朝回診、考えて作られた朝ごはん、病院内での自由時間、昼ごはんにもまた回診、夕方までの自由時間、夕ごはん、一日を占める回診、そして年頃には早い就寝時間。毎日がこの繰り返し。

個室であるため新たな入院患者など入って来るはずもない。

「UFOでも来ないかなあ...」

突拍子もないことを言ってしまう。

でもいいのだ。どうせ誰もいないのだから。

「宇宙人にでもさらわれたいのか」

いきなり声がした。

声の先を見る。ドアの前に沢井みなみが立っていた。

「なんだ。みいか」

少し驚いたことに損した気分だった。

「ひどっ！せっかく会話繋げたのに」

「別に...単なる一人言だもの」

優子は窓の方にそっぽ向いて言う。

「一人言がUFO来ないかな、もう少し問題よ」

「なら隕石でも降ってきた方が現実的？」

言ってからヒネくれているなと思った。

みなみはそんな優子に呆れながらもベッドの傍にあるパイプ椅子を引いて座る。

手にはやけに中身の張ったバッグがある。言わずも優子にはわかる。

それはみなみも同じで、次々に中身を出していく。

「これ、今日の国語のノートとプリント。で、これは数学の小テスト...この社会のプリントは...」

と、説明している横から優子は引き出しからシャープペンを取り出す。

そして、数学のプリントに手を止めることなくスラスラ答えを埋めていく。

「はい、あげる。三十分居てくれたら残りも全部終わらすから待ってて」

瞬く間に国語のプリントも書き上げてみなみに渡す。

皆が一つ一つ十五分はかかる小テストを五分かけずに終わらせていく。

担任からは十五分計って、と言われていただろう。

受け取ったみなみは

「可愛い気がないわね。こういうのは悩んでいる人間を隣から見て楽しませるものでしょ」と文句を言う。

なら、

「ごめん。社会は苦手だからお願いしてもいいかな」

顔、無表情。声、棒読みで白紙の紙を渡す。

ならば、とみなみも

「1932年に犬養毅が暗殺された事件は？」

「五・一五事件」

「1925年に成立されたのは？」

「普通選挙法」

学生の性と言うべきか。優子も反射で答えてしまった。

にっこりと笑ったみなみは

「よく出来ました。問一と問二の答えになります」

と、空欄の所をトントンと指した。やられた、とウンザリしながらも優子はシャープペンを動かす。

そのままの流れであっさりと続きも埋めてしまった。所要時間きっかり三十分。

「お疲れ様。相変わらずの秀才ぶりで嬉しいわ。明日先生の所に持っていくから」

「どうも」

嫌味ながらどうせ全て当たっている。

でもそれも優子にはどうでもいいことだ。こんなものが合っていようがいまいが興味すらなかった。

100+100=200。1192年には鎌倉幕府。作者が何を思って書いたか述べてよ。それが何だ。

働いた経験がない優子に言えることではないが、1192年に鎌倉幕府が出来たことを覚えて、一体何人がその人生の役に立つのか。TVで政治家が自信を持って演説をしている光景を目にする。だが誰一人としてそんな大昔の歴史を語ることはない。敵となる相手の誹謗、中傷ばかり。「歴史とは財産です」どこかの評論家が言っていた。その財産で何をしたんですか。

そんなことを思い出しながら、スライドテーブルに置かれた国語のノートに目を落とす。

「こんなもの意味ないのに」

ノートはコピーを綺麗にパンチングしたものだ。

今日にも死ぬかもしれない優子のためにみなみはコピー代を払ってまで持ってきてくれる。

「学校の授業なんて大半が意味ないもんよ」

「それがわかってて行ってて、楽しい？」

「皆、寝るか喋りに来てるだけだからねえ」

みなみは笑って言った。

でも、みなみは寝ていない。優子のノートを作るからだ。授業に出ていない優子は日々の内容をノートと教科書から学ぶしかない。

しかし、教師も馬鹿みたいそこからテストを作ることはしない。きちんと話を聞いていたかを見るために口頭で伝えた内容も加える。

みなみはそれも書いてくれる。その甲斐あってみなみのノートは中学生が作ったものかと疑う出来映えだ。

おかげで、自分も勉強がしやすくて楽になった、と礼を言われたこともある。本来はこっちが言うべきなのに。そんな親友の苦勞の結晶を静かに引き出しの上に置いた時に気付いた。

「みなみ、今日部活は？」

時計が目に入って見るといつもより早く来ている。

入院生活が長いと時間感覚がわからなくなるのだ。

「んー。自主練の日だからサボった」

プリント類をしまいながらみなみは答えた。

ああ、まただ。

「いいの？そんな調子で。今回のコンクールの曲難しいって言ってたじゃない」

「悪いけど、これでも吹奏楽での推薦枠持ってんのよ」

フフンと鼻高々に言うと

「あ、そうそう。忘れるとこだった」

再びバッグの中を漁り出した。

取り出したのは一枚のB4サイズのプリント。

『志望校調査書』 一行目にはそう印字されていた。

「来週までに書いといてだって。まあ、私ら二年だし深く考えなくていいって」

「これでいいよ」

名前も書かずに白紙の調査書をみなみにそのまま返す。

「優...」

突き返された紙を見て、初めてみなみは暗い顔になった。

優子は親友のそんな顔を見れず、ベッドの上で体育座りになり、黙る。

志望校欄は全部で五つ。半分も書けない程成績が悪いわけではない。いや、むしろ優子は学年では上十位には入る。選びたい放題だ。でも書く気がない。

その理由はみなみも知っている。だから何も言えない。

さっきまで軽口を開いていた空気は一変して重くなった。自分で作った空気なのに優子は逃げたい気持ちになった。

「...あ。優、今日実はね——」

思い出したようにみなみが切りだそうとしたとき

「みなみちゃん。まだいる？」

と、ノックなしで看護婦さんが入ってきた。

「あ、やっぱり。ごめん、面会時間もう終わるんだ」

腕時計を指しながら言うと、

「わかりました。...じゃ優、それ書いといて。それと...これ今日の連絡事項ね」

突き返された調査書の上に重ねて置いた。

いつもと違う様子のみなみに

「何かあったの？」

と尋ねる看護婦さんに

「いえ、クラスの男子にからかわれて愚痴られてただけです」

優子は作り笑顔で返した。

それから、運ばれてきた夕ごはんを綺麗に平らげた優子はテーブルの隅に置かれた調査書を見た。

書ける訳がない。書いてどうするのだろう。書いても通えない。中学校にだって二年になった今も行った回数は片手でだけ。指を折り返したこともない。

自宅から歩いて十五分の中学校でその様だ。通学時間を優先に考えても一番近い高校まで自転車で二十分はかかる。

「だったら通信制は？」と、以前にみなみに言われたことがあった。

通信制ならば通う必要性はない。両親もその案には賛成した。

だが優子にとって通信制であろうがなかろうが進学など意味がない。自分はいつ死ぬかわからない。それは誰しも同じだ。でも、優子の心臓はいつ止まってもおかしくない不良品。不良品とわかるものに金を出す人間なんていない。

「人間はモノじゃない」誰かが言いそうなセリフだ。

ならば、そんな不良品に数百万払い続けられますかと言いたい。

病院はタダではない。ベッドに寝ているだけでもバカにならないお金がかかる。薬の出せば薬

代が、検査をすれば検査代が。それが続けば莫大な治療費になる。

ただでさえ優子は持病持ちのせいで特別な薬を飲むよう指示されている。

興味本意で薬の価格表を見たことがある。目を疑った。店で売っている風邪薬とは桁が違った。

以来、優子の口から「痛い」「つらい」という弱音が消えた。

そしてこう思うようにもなった。

『早く死なないかな』

## 選択

---

「優子ちゃん、こんにちは」

「こんにちは」

病室へ帰る通路で知り合いのおばあさんと挨拶を交わす。

もう七十歳を過ぎているらしい。元気そうに見えるが、肺が悪いと弱々しい笑顔で言っていた。

多分先は長くない。そこまで聞いた訳ではないけれど察しがつく。

肺が悪いと聞けば大抵が肺癌と思い、年齢も加えれば末期と想像する。

だが、優子には別に理由がある。それが病棟だ。

患者は病名は伝えられるが、どのくらい悪いのか伝えられないこともある。

悪意ではない。知らないほうがいい真実もあるという事だ。

そういう知らされていない患者を入れる病棟に優子もこのおばあさんもいる。故にこの病棟では毎月のように死が訪れる。

だから優子は暇があると、一般病棟や外に散歩に出る。今、戻ろうとしてるのは昼の回診があるから。

忙しいナースステーションを過ぎようとした時

「優子ちゃん。お客さん来てるわよ」

と看護婦さんに背中に言われた。

「お客...ですか？みなみじゃ」

「もっといいわよ。男の子だったわ。しかも優子ちゃんと同じ学校の制服着てたから通しちゃった」

ニヤついた顔で看護婦さんは言った。

優子は壁にかけられた時計を見る。

昼を過ぎた一時を回ったばかりだ。学生ならば普通午後の授業のはずだが。

しかし、すでに部屋に案内したとあれば待たす訳にもいかない。

「ありがとうございます」

と、終始ニヤついたままの看護婦さんを後に病室に向かう。

はて、誰だろう。授業もそうだが、中学に上がってから見舞いで来る人間は限られてきた。

みなみはしょっちゅうだが、あの気まずい一件からきていない。今でも来るとしたらクラス委員か、担任以外思い付かない。クラス委員の片方は男子だが、それなりに来ていたから看護婦も顔を覚えている。

看護婦さんは何か勝手な妄想をしていたようだけど、長い入院生活の優子にそんな色気ある付き合いはない。

生まれてから告白の類いの経験すらないのだ。先に部屋に通したらしいが、まあ女の部屋ながら見られて困るモノなどない実に殺風景な部屋だ。下着くらいならあるが盗みたければ好きなだけどうぞと思う。

部屋の前に着いて、何故かノックするべきか一瞬迷った。自分の部屋だけど知らない客が来る



など数年ぶりだからだ。

迷った挙げ句、しないよりはマシかと思いノックをして入った。

開けた先に確かに男の子がいた。勝手に窓を開けていたらしく程よい風がカーテンをなびかせ一瞬男の子の顔を遮る。

「待たせてごめんなさい。お客さんってあなた？」

優子が声をかけると男の子はゆっくりこちらを向いた。

短すぎず長すぎずのちょうど髪が揺れる。中学生にしては幾分大人びたクールさを感じさせる。

しかし、その顔に優子は見覚えがない。違うクラスの男子だろうか。

そう思って

「あの...違ってたら悪いんだけど違うクラスの人？学校にいてないから顔もうろ覚えで」と聞いた。

男の子は答える気がないのか、首すら振らず無表情で黙ったまま視線を揺らさない。

「もしかして別の人のお見舞いで部屋間違えたとか？だったら——」

「前田優子。十四歳」

唐突に言われた。

「小学三年で心臓病と診断され、治療の甲斐も虚しく、治らなかった」

「あなた...誰」

優子は前を向いたまま後ずさる。

「以来、その場しのぎの内科的治療を受けている。不発弾の心臓をかかえたまま。合っているか？」

少年もゆっくりと歩を進める。

心臓悪いことは学校の友人たちも知っている。が、治療のことを話しているのは担任と一部の先生、みなみくらいだ。他の友人たちは知っているはずがない。

「あなた、学校の生徒じゃないわね」

ドアの傍まで来て、取っ手を手探る。

僅かでも隙間を開けて声を上げれば大丈夫だ。

「死にたいとも思い、また生きたいとも思う」

ドキリとした。

親にもみなみにも言っていない心の底を言われたからだ。

動揺が体に現れて、履いていたスリッパから足がずれて体勢が崩れる。僅か数秒のことだったが...

いきなり少年が鋭い速さで距離を縮めた。

優子が足元から目を上げた時、すごい力が体を襲った。

声を出そうとした口は手で覆われ、壁に叩きつきられた。

無我夢中で暴れて振りほどこうとしたが、所詮は女の力。男の力に敵うはずもない。

「本当に死にたいのか、生きたいのか」

少年は口で右手の手袋をくわえ外す。

零の距離で見る少年の目が冷たい。怖くなって初めて優子は体が震えた。

「選択肢をくれてやる。選べ」

次の瞬間、優子は重い衝撃を胸に食らった。

「っあ!？」

今までに味わったことのない痛みに優子は床にうずくまる。

ぼやける目で見上げると、少年は手袋をつけ直し

「すみません。前田さんが！」

とドアを勢いよく上げ、ナースステーションに言い放つ。

慌て部屋に駆け込んで来る看護婦さんたちが優子に駆け寄る。

痛みでよく聞き取れない。

(彼が...彼を捕まえて...)

心の中で叫ぶ声など届くはずもなく、優子は冷たい目で見下ろす少年が去る姿を最後に意識を閉ざした。

『死にたい?』

声が聞こえる。

『生きたい?』

また聞こえる。

『あなたはどちらを選ぶ』

真っ暗で何も見えない。

『選択肢をあげる』

あげる? 神様気取り?

『答えて』

「今のままなら、死んだほうがマシね」

『今のまま。不確定な未来。先がないのに、塞がった未来とわかっているのに、今を生きている今。でもあなたのせいではないでしょう』

「だからよ。自分のせいにも、誰のせいにも出来ない。なのに母さんも父さんも無駄に頑張ってしまう」

『無駄? あなたの両親は後悔していない。あなたを生んだこと。あなたに優子と名付けたこと。あなたに一日でも長く生きてもらうこと、あなたの為に働くこと。そしてあなたという子に出会えたことを』

「知った口利かないで! 二人がどれだけの苦勞してきたのか。今にも死ぬかもしれない私のせいでボロボロなのよ」『全ての物事にリスクはつく。命を生み出すとなればそれ相応の代償は払わ

れる』

「ふざけないで！誰もこんな代償なんか！」

『このような代償。治らない病。ならば不治となった病が消えれば生きたい？』

「それもどうかしら。今までの迷惑を思うと死んだ方がいいかもしれないわ」

『迷惑。お金。しかし、命は金より重いのではないですか？』

「善人ぶらないでよ。そんな偽善ぶった妄言、吐き気がするわ。私にいくらかかったと思う？百万なんてものじゃ済まないのよ」

『では。両親の真実を知ったらどうですか』

「真実...？」

『二人の人生。あなたがこの世に生を受ける前の人生』

「言われなくても知ってるわよ。父さんはサラリーマン、母さんは教師。二人とも一筋よ」

『それは半分に過ぎない。見せましょう。あなたの知らない真実』

頭の中に映像が流れこむ。

コンクリートの壁。薄暗い部屋。二人ともネズミ色の服で何か作業している。

楽しそうではない。こんな顔、喧嘩したときにも見せなかった。

映像はそこで切れた。

『どうですか。知らなかったでしょう』

「何...今の」

『刑務所にいた頃の二人です』

「...何...言ってるの？二人が刑務所？何の冗談？」

『真実ですよ。二人とも世の理不尽に絶望し、母親は詐欺を父親は盗みをした。そして改めることない心のまま外に出た。そして出会い、あなたが生まれた。最初は望まなかった。捨てようかとも考えた。当然です。傷の舐め合いの行為で生まれた子です。頼る先も物もなく、自分たちで育てるなど刑務所暮らしの方が考えるまでもなく楽です』

「...」

『けれど二人にも思いはあった。自我もなく、右も左も知らず、世の理不尽すらわからない子に、自分たち以上の不幸はさせたくない。日々見つける仕事であなたを生かし育てた。今まで以上の理不尽があったはずです。けれども、一つ違った事があった。何も知らない、自分たちを親ともわからないはずの子が自分たちに笑ってくれる。人として入ってはならない場所に踏み込んだ人以下の自分たちを笑顔で迎えてくれた。あなたの笑った顔が、哀しい顔が、怒った顔が、全てが許してくれる。世の理不尽は許せなくとも、あなたがいるから耐えられた。あなたの存在が救いになった』

「実に都合の良い、素晴らしい脚本。ドキュメンタリードラマで涙を誘えそう」

『百の人間がいれば百の過程がある。あなたの両親がそれであった。それだけです』

「嘘よ...こんな話...」

『金と命。二つを天秤にかけた時、どちらに傾くのか、それはわからない。金に傾く現実もある。だけれど、あなたの両親は命だった』

「...」

『世の天秤など忘れなさい。今はあなたの両親の天秤だけを見なさい。そして今一度尋ねましょう。死を望む？生を望む？』

「生を望んで私は何をすればいいの？」

『それが私の訊きたい事。でも今すぐではない事。生を選択したあなたが生きていく過程で見つけ、いつか答えを出して欲しい事』

「要はあんたもわかんないでしょ。丸投げじゃない」

『では死を選択しますか』

「...いえ、生を望むわ。でも偽善ぶるつもりはない」

『ふふ。楽しみです。人の過程にもその結果にも正しいも間違いもない。それは人間が数千の歴史で決めただけのこと。善も悪も、命の選択も本来は自由。あなたが選択した生がどのような結果となるか、待っています』

「待って。一つだけ答えて。あんた誰なの」

『誰なのか。人であるのか、人でないのか。それもまた会えた時に答えましょう』

## リスク

---

『彼女は生を選んだわ』

「そうか」

『意外？』

「さあな。誰も他人の心はわからない」

『答えないのね』

「あんたが知りたいのは俺じゃなく彼女の答えだろ」

『でもあなたの答えも聞くわ』

「しつこい。出すには時間が足りない」

『わかっているわ。だからあなたには契約を交わさせた』

「...」

『時を見て、彼女に会いに行って』

「ふざけるな。あんたに頼まれた事はやったが、これ以上は断る」

『人の言葉でいうアフターケアというものは知っているでしょう』

「あんたが人を語るとはな。それとも彼女に何かあるのか？」

『気に入ったの。"偽善ぶるつもりはない"。生を選択した時に彼女が言った言葉。人は知性を持ったが故に狡猾、傲慢、妥協を覚えた。今まで生を選択した人間は、何かの役に、誰かの為にと言ったけれど、末路は己の言葉さえ忘れ自己満足に浸るばかり。けれど、彼女なら求める答えを出してくれそう』

「傍観者も大概にしておけ。俺にも選択肢はある」『それは契約破棄かしら？構わないけれど代償は覚えている？』「...」

『それはそれは構わない。それがあなたの答えならば』

奇跡だ。信じられない。

医者、看護師、全ての者がその言葉ばかり言っていた。

当然と言えば当然だ。

朝に検査を受け、一通り終わった優子はベッドで両親から事の顛末を聞いた。

あの見知らぬ少年に襲われた優子は、心停止に陥った。緊急の心肺蘇生措置を行い、息は吹き返したものの、実に丸三日間意識が戻らなかったらしい。

この時、主治医の脳裏には脳死の可能性が浮かんだという。その直後、ICUで三十秒に満たない覚醒をした。

問題の奇跡はそこからだった。

今まで弱々しかった心電図の波形が、比喩物にならない安定した反応を示したのだ。機器の故障かと別のものと取り替え、再度行ったが結果は同じだった。血液検査ではいくつかの引っ掛かりが出たが、夕食から栄養面を変えて行けば、その問題も解決するとの事だった。

とりあえず、一週間は毎日精密検査を行い、今後の治療方針を考え直すと言われた。

だが、何より驚いたのは一週間の検査で問題がなければ、早々に自宅療養に切り替え、それも異常がなければ通院が条件で学校に通う事も可能になるとまで言われたのだ。

あくまで可能性、断言されたわけでもないのに両親は泣き崩れた。

母さんは一日泣き通し、疲れ果て、今は簡易ベッドを優子の隣に運んでもらい静かな寝息をたてている。

「神様、ありがとうございます」

繰り返す呪文のように母は言っていた。

父さんも母さんに頷いて泣いていた。

だが、優子だけは違う。

『死にたいか、生きたいか』

『死を選択する？生を選択する？』

あの少年と女の声。あれが今回の原因だ。

あの時、病室に駆け入った看護婦さんたちに少年のことを聞いたが、皆して「いたかしら？」と口を揃えて返答した。無理はない。

患者が突然心停止する緊急事態の中、優子すら知らない人間の顔をしっかりと見ている余裕などあるはずがない。「優子、起きてるか」

父さんが静かに入ってきた。

今まで母さんの分の入院の事も聞いてくれていたのだ。

「うん。母さんはぐっすり寝てるけど」

目配せで母さんの方に視線を送る。

「無理はないよ。三日間、看護婦さん以上に優子を見ていたんだ」

母さんの傍に寄って頬を撫で

「父さん、一度家に帰って必要なもの取ってくる。母さんの分あるから。一時間くらいいないけど平気か？」

心配そうに優子を見る。

「大丈夫。何かあったらナースコール押すから」

言ってから、あの時押せなかった現実を思うと説得力に欠ける。

が、父さんは

「父さんも念入りに言っとくよ。すぐに戻るから」

と気にすることもなく言って出ていった。

多分、頭の中は娘の奇跡で舞い上がっている。

名残惜しそうに部屋を出た父を見送った後、優子は母を見た。

『真実ですよ。母親は詐欺を、父親は盗みをした』

あの女の言葉が信じられない。

生まれてからそんな過去を見せる素振りはなかった。

いや、見ようとしなかった。

優子は知らず知らず、自分ばかりで悲劇のヒロインになっていたから。

思えば、不治とされる前も後も自分ばかり。

—まだ中学生だから—。

それも甘えかもしれない。中学生になれば、何が良くて悪いのかの区別くらいつく。

—患者なんだから—。

それは病院と患者が生み出した過ぎた暴権の一つ。患者だから何もかも許されるわけがない。

優子は、不治とわかった後も最低限の生活は送れていた。風呂にも入れた。階段も一人で歩けた。食事も多少の制限はあっても食べれた。友人とだって普通に笑って喋っていた。

世界の子供たちに比べたら、なんて大袈裟にする気はない。が、それでも…。

気付くと布団に水滴が一つ二つ落ちていた。

頬に触れ、初めて涙と知る。

「まだ残ってたんだ…涙」

とうに枯れたと思っていた。

最後に泣いたのがいつだったか、それすら忘れていた。

落ちる涙が五つ目になった時、ドアが開く音がした。父さんが来るには早すぎる。看護婦さんだろうが泣いてるところは見られたくない。

優子は慌てて目元を手で拭う。

「自分で生を選択した後に、その余韻に浸るか。思ったよりセンチメンタルだな」

—ドクン—。

心臓の鼓動が激しく高鳴った。

この声…。

「聞いていた話もっとクールな人間だったが、あれは仮面か」

この低いトーン…。

優子は身構えるようにゆっくり手を離し、顔を上げる。

「どうだ。望んだ健康な体は」

少年が立っていた。

あの時と変わらない表情で、制服で。

「声が出せない程感無量か？」

今回は会話をする気があるらしい。

「ありがとう…って言えばいいかしら」

助けてもらったから礼とは我ながら律儀だが何かおかしいか。

「礼を言われる筋はない。金ももらう気はない、あんたの親にも友人にも頼まれたわけでもないからな」

「そうね。助けてもらったけれど、襲われた事を含めればお互い様かしら」

内心、いい度胸してると思う。

「それは謝ろう。だが説明して納得する性格ではないと思ったんだが」

少年は誠意ゼロで言うと、母の方に足を進めた。

「母さんに触らないで！」

精一杯の声を出したが、如何せん三日間眠り続けた体だ。小さい。

恐らく外に聞こえていない。

「安心しろ。何もしない。あんたの様子を見てこいと頼まれて来ただけだ」

「だったらもう見たでしょ。さっさと消えて」

鋭い目で少年を威圧する。

いざとなったら引き出しの上にあるペンで刺してやる。そう警告すべく、手にペンを握る。

優子の無言の警告を察したのか、少年はやれやれと母との距離を広げた。

しかし、出ていく気はないらしく、壁に背を預けて腕を組んだ。

「出てけと言うなら従うが、いいのか？何かしら聞かれると思っていたんだが」

「へえ、意外と紳士ね」

「生を選択した人間が全員そうだったからだ」

それは当然だろう。

「なら、何で私を助けたの？」

「女の気まぐれだろう。あんたも話したろう。上から目線の女と」

あの声だけの女の人か。いや、人と分類していいかはわからないけれど。

「何それ。女神様が決めたってこと？」

「一つ言い忘れていた。俺の前で神という言葉を使うな。虫酸が走る」

表情を変えなかった少年の顔が初めて険しくなる。

「あら、気が合う。私も大っ嫌いなの」

地雷なのだろうか。

「なら何で天使じみた事してんの？どうにも、お困りのかたお助けしますってタイプには見えないのだけど」

「好き好んでこんなことするわけない。やらされているだけだ」

「それは相当な物好きか酔狂ね」

どうも本気で全部話してくれそうにはない。

まあ、いきなり神がどうか、手で触れたから治りました、なんて実際に身を持って知った優子でさえ半信半疑あのだ。次は聖書でも語られそうだ。

とりあえず優子は一番気になることを聞く。

「あんたがどこの誰で何で私を助けたのか。それはあんたなりの事情があって、言いたくないならいい。でもこれだけは真剣に答えて」

握っていたペンを元の場所に戻す。

「全部、真面目に言ったが」

と少年は残念そうだ。

「リスクは何？」

「...は？」

なんとも間の抜けた顔で少年は首を傾げる。

「正直に言って。過度な期待もしないし、覚悟もあるから」

真っ直ぐに少年を見て言う。



「なんだ、それ」

「医者からはどうにもならないと言われた病を手で触れただけで簡単に治した。この後に何もないと考えるほうがどうかしてる」

覚悟はしてても若干体が震える。

実は、優子は医者から治ったと言われたすぐ後、それ以上の恐怖を覚えた。

あの声だけの女性も言っていた。

『全ての物事にリスクはつく』

事実だ。

優子の病名、アダムス・ストークス症候群は決して治らない病気ではない。

実際にペースメーカーを使用して健全に過ごしている人間も多くいる。けれど、全ての者がそうはならない。

人間の体は千差万別だ。優子は体の組織が非常に脆く手術が出来なかった。

手術で一か八かに賭けるか、内科的治療で見つかるかわからない治療法を待つか。優子の両親は後者を選んだ。手術などやってみなければわからない。難しかったら中止すればいい。

優子も当時は思った。だが手術には患者の体力が不可欠。手術中は寝ているだけだが体は違う。

体を切るのだから、傷を癒す。血が流れるから作る。加えて優子は心臓を一時停止させる。体の日常業務にそれだけの負担をかけるのだ。術中死もある。

世界の医者がそれらを考え断念するほどだ。手で触れて治しました。

素直に喜べるほうがどうかしてる。

「リスクならあった。選択を迫られたろう」

「馬鹿言わないで、クイズ形式で出された感覚よ」

「人間の生死の境目なんてそんなものだ。人間にとって生死を分ける程のリスクはないだろ」消化不良な答えだった。

「一つ言い加えるなら、生を選択した後に何をすればいいか考える苦悩くらいだな」

「それにそぐわない答えだったら死を迫られるの？」

「自分で死を選ぶなら。こちらから迫ることはない。正確に言うなら出来ないが正しい」

「意味わかんない。助かったから正しく生きるとは限らないのよ」

「だから最初に言ったろう。女の気まぐれだと」

何遍言わせるんだと少年は億劫に言った。

「でも、俺にはあんたがそういう道を選ぶとは思えない」

「買いかぶりね。私も人間よ」

「命の選択とは本来個人の自由。死を選ぶことが罪に等しいなど人間の勝手な道德心が作っただけ。あんたは、そう思う人間だと俺は見るけどな」

少年は言った。

優子は何も言えなかった。

黙ったままになった優子に少年は

「またすぐに会うことになる。その時は初対面の振りだな」  
それだけ告げて部屋を出た。

優子は言い返せなかった。返せるのは同意だけだったから。